

小学校体育授業における新人教師の優秀性に関する実践学的検討

－〈運動のつまずき（予兆）〉の気づきに着目して－

杉山 友太（和歌山大学大学院）

I. 目的

本研究は、新人教師(教職経験年数 4～8 年)の中で体育授業研究会(名称：身体教育研究会)に参加している優秀な教師 3 名と小学校長および教育委員会からの優秀な教師として推薦を受けた教師 2 名の計 5 名(高学年担任：2 名，低学年担任：3 名)を対象に、〈運動のつまずき(予兆)〉の気づきとそれに対する「推論－対処」の内容を比較の観点として、新人教師の優秀性を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1) 〈運動のつまずき(予兆)〉の気づき調査

毎授業終了後(放課後)に、「〈運動のつまずき(予兆)〉の気づき調査票」(藤澤ら：2017)の記入を依頼した。

2) 授業実践と収録

被験教師には、1 単元が 6 時間で構成される授業の計画と実践を依頼した。また、単元 1・3・5 時間目の教師の動きおよび子どもの動きの全てをビデオカメラ 4 台で収録した。さらに、単元前後において態度測定(小林：1978，梅野ら：1980)を実施した。

3) 体育授業における教育観の調査

「教師の体育授業に対する信念に関するアンケート」(池田・梅野：2004)を用いて、被験教師の体育授業における教育観を調査した。

III. 結果ならびに考察

高学年事例および低学年事例の分析結果より、共通した内容を以下に示す。

- 1) 体育授業研究会に参加している優秀な教師 3 名は、態度測定が「高いレベル・成功」と診断された(上位教師)。一方、他の 2 名は、それが「ふつうのレベル・横ばい」もしくは「やや低いレベル・横ばい」と診断された(下位教師)。
- 2) 一授業あたりの〈運動のつまずき(予兆)〉の気づきの平均個数は、「上位教師(5.9 個)」の方が「下

位教師(3.1 個)」よりも顕著に多い結果となった。また、〈運動のつまずき(予兆)〉の気づきに対する「推論－対処」の記述内容は、「上位教師」では「合理的推論－目的志向的対処」が大半を占める状態にあったのに対して、「下位教師」では「印象的推論」に特徴づけられる結果であった。これらの結果より、「上位教師」の方が「下位教師」よりも〈運動のつまずき(予兆)〉に気づくために必要とされる「運動教材に関する理論的知識(運動の構造的知識、つまずきの類型に関する知識、指導プログラムに関する知識)」の理解度が深いものと考えられた。

- 3) 〈運動のつまずき(予兆)〉の気づきに対する手立てと実地指導との対応関係をみると、「即時的・即興的な思考による働きかけ」では「下位教師」の方が「上位教師」よりも多い傾向にあった。これに対して、藤澤ら(2018)の提示した「一人前教師群」の特徴(反省的・熟考的な思考による働きかけ)を認めることができなかった。このことから、新人教師は「一人前教師群」が有する「つまずき指導の予期図式」を形成するには至っていないものと考えられた。

- 4) 体育授業における教育観をみると、「上位教師」は「主体的に運動を学び取り、運動技能を高める体育学習」を、「下位教師」は「運動することを楽しむ体育学習」をそれぞれ志向していた。このことから、「上位教師」は「主体的に運動を学び取り、運動技能を高める体育学習」を志向していることによって、「運動教材に関する理論的知識」の理解度を深めていたものと考えられた。

IV. まとめ

以上の結果より、新人教師の優秀性は、「運動教材に関する理論的知識」の理解度の深さにあるものと考えられた。